

ハイビジョン映画LDのメリット——日野康一

●映画の製作プロセス

劇場用映画は基本的に35ミリネガで撮影され、35ミリポジ・リリースプリントで劇場に供給される。

アメリカ映画などの撮影フォーマットには2種類がある。アカデミー協会規格のフラットネガ（スクリーン映写のアスペクト比1対1.33＝テレビジョン規格が準拠）、およびアナモフィック（歪像）レンズによって左右を圧縮収録する圧縮ネガ（アナモフィック・プロセス、いわゆるスコープ。劇場映写の際、左右を拡大復元する。アスペクト比1対2.35）。

劇場でワイドスクリーン映写（アメリカではアスペクト比1対1.85、ヨーロッパは1対1.66）する作品はフラットネガで撮影され、インターポジまたはインターネガ製作ないし劇場映写までのいずれかの段階で画像上下にマスクする。

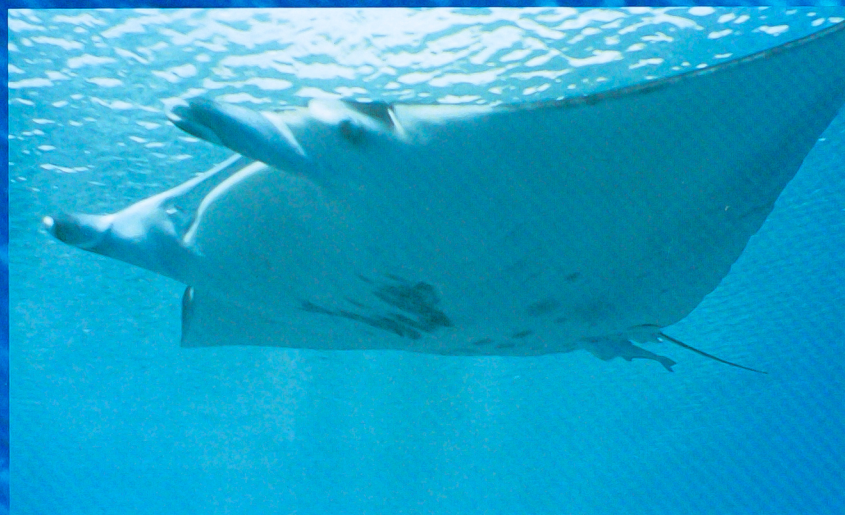
最終編集ずみのカメラネガからダイレクトに密着ポジ変換するのがインターポジ、ネガ→ネガ複製するのがインターネガ。その際、カラータイマー（クレジット・タイトルに表記される担当者）が露出設定とカラー調整（焼度検定）を行う。とくにクォリティの高いフィルムを用い、精細なディテール表現と次世代素材への順応性が要求される。これが映画のオリジナル・マスターソースであって映画の魂、映画会社には宝物だ。スクラッチをつけたりゴミがつかないように、現像所または製作会社が厳重に管理、保管して門外不出となる。

インターポジから転換したデュープネガ、またはインターネガからリバーサルフィルムでネガ→ネガ複製したネガをCRI（Color Reversal Intermediate）と呼び、劇場用リリースプリント量産の原版となる。

日本で公開される外国映画は、原則としてプリント本数が少量の場合は、リリースプリント現物を輸入して膜面に字幕を物理的に打ち抜き（インプレス字幕）、多量のときはCRIを借用して字幕を写真的に焼き込む（スーパーインポーズ字幕）。

劇場上映されるリリースプリントはカメラネガから数回の転換、複製が行われるため第4世代以降となり、画質の劣化は避けられなかった。

映画オーディオの製作にはスプロケット（送り穴）がある通常のフィルムベースにメタルコーティングした35ミリシネテープに磁気録音する。シネテープからプリントの画像横に搭載される映画独自の光学サウンドトラックに転換される。映画製作現場ではカチンコと呼ばれる拍子木で映画撮影機と録音機のシンクロナイズを行い、同時録音ではカチンコの合わせ目が画像と音声の目じるしになり、シネテープには録音テープにないスプロケットがあるため、画像と音声合わせが容易である。



●ハイビジョンへの対応

従来のテレビ、ビデオ（LD）用マスターはインターポジ、またはインターネガ以後の世代の素材、主としてリリースプリントからテレシネ（フィルムの写真映像を電子映像信号に転換する機器）されてきた。マスターから複製を数回重ねるため、第7世代程度となる市販ビデオソフトの画質の劣化は顕著となっていた。「フランチック」（88年）からD2コンポジット・デジタルが導入されてデジタル複製が行われ、劣化はいちじるしく減少した。近年の米メジャー作品では、オリジナルネガから劇場用とは別にテレビ、ビデオ用にテレビフレームでインターポジを作成し、D2でテレシネした品質の高

いLDやビデオを見受けるようになった。

画像の素子数が現行テレビの約5倍もあるハイビジョンの素材にはさらに精細なディテール、輪郭の表現が要求される。劇場のクォリティに肉薄するため、よりハイクォリティな素材を求めると、カメラネガはカラータイミング（色の補正）の問題があり、インターポジかインターネガにたどりつくが、門外不出が原則である以上、貸してもらうことは特例を除いて難しい。外国へ貸与するのはCRIが世界映画界の常識。

ハイビジョンLDのオーディオも、でき

るMUSEディスクが完成する。

ハイビジョンLDはフィルムの情報量を確実に受けとめ、ラティテュード（諧調）が広いフィルムから暗部ディテールを損なうことなく、明部の輝きがつぶれることもなく、忠実な色再現、色の変化と深み、クリアな原色を再現する。衛星放送における伝送系の歪みを受けない利点もある。

従来のテレビでスコープまたはワイド映像を再生すると、上下に黒味があるため走査線525本のうちスコープは約300本、アメリカン・ワイドは約370本しか利用されず、ディテールが走査線に埋没してワイドスクリーン・ソフトのデメリットになっていた。ハイビジョンだとスコープで約850本、アメリカンワイドで約1080本を収容し、天地の解像力がケタがいいに増強される。

●映画ソフトの新しい楽しみ方

情報量が多いハイビジョンでは映画ソフトの楽しみ方も変わり、新しい可能性が生まれる。シャープなキレ味ばかりでなく、画像全体の落ち着き、遠近感、微妙な色再現とバランス、クレジットタイトルと日本語字幕の輪郭とキレのよさに注目したい。

「アトランティス」はスコープによる海中の世界が劇場の壮大なスクリーンにうつしだされた。従来のテレビで見ればテレビの海中もの番組と変わりなく、大きな35ミリカメラを海中に持ちこんだ意味がなくなってしまう。ハイビジョンLDにしてはじめて家庭でも真価を発揮する。さらに一步近づいて横長の画面を視野いっぱい収めよう。

熱帯の海、氷の海、紺碧の海は無数の水泡がダイヤモンドのように輝く幽玄の世界。あなたが魚になって海中深く潜ると、魚たちが写されようと寄ってきてあなたとコミュニケーションする。手で触るようになめらかで自然な魚たちの体と細やかな色調、優雅な動き、隣人のような表情。

ハイビジョン映画LDはハイビジョンでなければ味わえない法悦を呼ぶだろう。

アトランティス動物解説

PERFORMERS PROFILE

安部義孝 (あべ よしたか) 東京都葛西臨海水族園/園長

■何種類かの魚の群れ

(種の査定不能)



■オニカマス

Great Barracuda

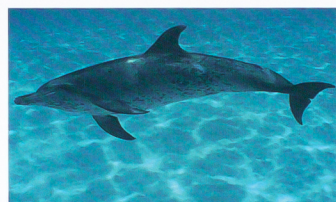
スズキ目、カマス科。全世界の熱帯域に分布。80cm。大型個体は1.5mになる。魚食性。群泳し他の魚群を襲う。遊泳中の人を襲うことがあり、サメとともに危険な魚とされる。



■マダライルカ

Spotted Dolphin

歯鯨亜目、マイルカ科。太平洋及び大西洋熱帯域に広く分布。体長2.1m、体重100kg。体色と模様は年齢とともに変化する。近似種にカスリイルカがいる。他のクジラ類と同様聴覚に優れ、超音波を発してその音か物に当たってはねかえってくるのを感じとして、自分の位置を知ることができる。また、仲間同士の交信もこれによって行う。



■マダラハタ

Black Rockcod

スズキ目、ハタ科。太平洋、インド洋の熱帯域に分布。体長50cm。近縁のアカマダラハタの可能性もある。小魚、イカ、タコなどを食べる。食用。

■イソマグロ

Dogtooth Tuna

スズキ目、サバ亜目、サバ科。インド・西太平洋の熱帯域に分布。2m。サンゴ礁の周辺を回遊し、大群はなさない。磯釣りの対象。食用になるが不味。

■アオウミガメ

Green Turtle

カメ目、ウミガメ科。全世界の温帯、熱帯域に分布。甲長1.2m、150kg。アマモなどの海藻を主食にしている。沖縄では5月頃砂浜に上陸し産卵する。世界のウミガメ類は全てワシントン条約で国際取引が規制されている。



■アオマダラウミヘビ

Banded Yellow-lip Sea Snake

有鱗目、ヘビ亜目、ウミヘビ科。沖縄、ポリネシア、オーストラリア、ニュージーランド、東南アジア各地に分布。魚類にもウミヘビ科があるが、これは爬虫類のウミヘビである。このようにまだら模様の種類が多く、映像だけでは査定が難しい。サンゴ礁の小魚を食べている。ウミヘビ科はコブラ科に近縁である。後牙類といって、毒牙は口の奥にあるので、咬傷は受けにくい。咬まれると神経毒で死ぬことがある。陸上にも上がり、5から6個の卵を産む。



■トラフザメ

Leopard Shark

ネズミザメ目、テンジクザメ科。南日本からインド・太平洋、オーストラリアに分布。体長2m。若魚ではトラフ模様があるが成魚では褐色。サンゴ礁の砂底にすむ。底生の小動物を食べる。

■ガラパゴスペンギン

Galapagos Penguin

ペンギン目、ペンギン科。世界のペンギン類18種は全て南半球に分布する。多くが南極の寒冷地にすむのだが、本種のみフンボルト寒流に乗って極地から赤道直下のガラパゴス諸島に分布を拡げた。



■ウミグアナ

Marine Iguana

有鱗目、トカゲ亜目、イグアナ科。ガラパゴス諸島固有種。体長1.2m。トカゲ類で唯一の海藻食。ガラパゴス諸島の岩礁海岸に棲息し、潮留まりや数メートルの水深のところを潜水し海藻を主食にしている。恐ろしそうに見えるがおとなしい。水かき、鰭など遊泳器官はあまり発達していないが、塩分を排出する塩腺が眼と鼻孔の間にある。



■マルコバン

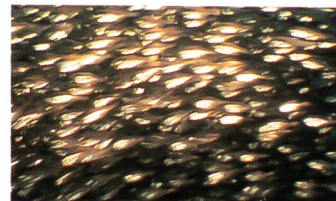
Moon Fish

スズキ目、アジ科。南日本からインド・西太平洋に分布。体長50cm。群泳する。食用。

■キンメドキ

Slender Sweeper

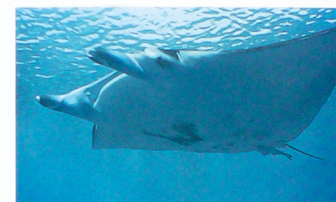
スズキ目、ハタンボ科。関東近海から、マニラ群島に分布。体長7cm。群泳し、夜行性で昼は物陰に潜む。映像では正確な査定は出来ないが、仮にキンメドキとした。



■オニトマキエイ

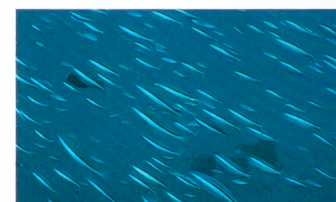
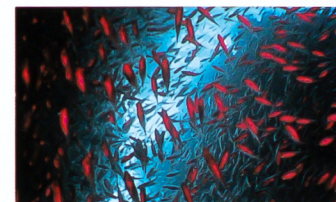
Manta

エイ目、イトマキエイ科。世界の熱帯域に分布。体長2.4m。体の幅は長さの2倍ある。尾に毒刺は無い。胸鰭の一部が耳状に延びて頭鰭を形成する。プランクトン食性。胎生で仔魚を産む。ときに水面をジャンプする。



■キンメドキやネンブツダイの仲間

(種の査定不能)



■ミズダコ

Pacific Giant Octopus

頭足類、マダコ科。本州、北海道から北太平洋に分布。数亜種ある。3m。タコ類としては最大種。北海道では多獲され、食用。肉はマダコより柔らかい。



■オウムガイ

Nautilus

頭足類、オウムガイ科。太平洋の熱帯域に分布。殻の直径20cm。古生代カンブリア紀から中生代までおびただしい種がいたが、現存種は6種のみ。殻には隔壁があり、隔壁には窒素ガスが詰まっている。動物は成長とともに外側に移る。触手には吸盤は無い。眼にはレンズが無く、海水を満たしている。海底でエビ・カニ類を餌にしている。



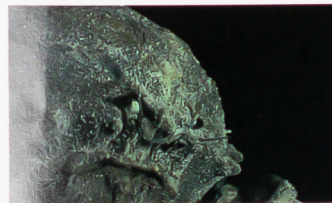
■コクテンフグ

Blackspotted Blowfish
フグ目、フグ科。インド・西太平洋に分布。
20cm。普通種。肝臓に劇毒。



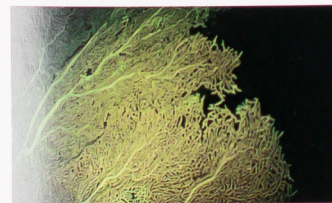
■オオカイカムリ

(英名なし)
十脚目、カイカムリ科。南日本から、インド・太平洋海域に分布。甲幅20cm。4対の歩脚のうち後ろの2対は小さく、これでカイメンなどを背負ってカモフラージュしている。カイカムリ類では最大種。水深20から50mの岩礁底にすむ。



■ウミウチワの一種

Sea Fans
刺胞動物、ヤギ類、イソバナ科。浅海の岩礁に着生する。高さ50cm。枝の小さいポリプがプランクトンを捕らえる。



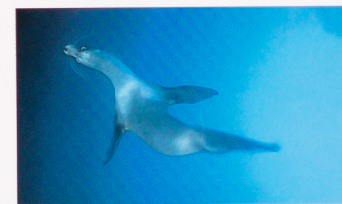
■アメリカマナティー

Carribean Manatee
海牛目、海牛科。北アメリカ南東部フロリダから南アメリカ北部ブラジルまでの沿岸や河口域に分布。体長4.5m、体重1600kg。海牛類の祖先はゾウと共通の祖先から進化した。海の草食獣。マナティーはジュゴンと異なり、尾鰭が丸い。これを上下に動かして泳ぐ。性質はおとなしい。アマモ等の海藻や淡水の水草を食べる。乱獲や棲息環境が悪化したため激減しており、厳重に保護されている。



■カライワシの仲間

(種の査定不能) *Lady Fish*
鰭脚目、アシカ科。ガラパゴス諸島に分布。雄は体長220cm、体重275kg。雌は体長180cm、体重91kg。カリフォルニアアシカの亜種。棲息数は約4万頭。出産期は6月から12月。魚類、イカなどを食べる。



■ウミウシの一種

Nudibranchs
軟体動物、腹足類、裸鰓目、ドーリス科。3.4cm。



■アカエイの一種

Stingrays
エイ目、アカエイ科。尾の背中側に刺を持ち毒腺をそなえる。映像の個体2尾とも雄。腹部に腹鰭の変化した交接脚が見える。



■ゴマウツボ

Leopard Moray
ウナギ目、ウツボ科。琉球列島からインド・太平洋域、東部太平洋に分布。体長1m。サンゴ礁の岩孔にすみ、タコやイカを食べる。近づくと鋭い歯を見せて威嚇するが、自ら攻撃することはない。不用意に触ると咬まれることがある。



■タテジマキンチャクダイ

Emperor Angelfish
スズキ目、キンチャクダイ科。南日本、インド・太平洋に分布。サンゴ礁にすむ。幼魚は成魚の体色と異なり、濃紺に白色リングを持つ。

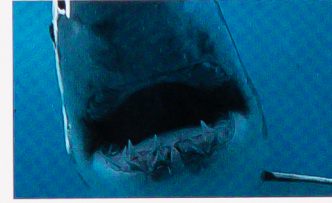
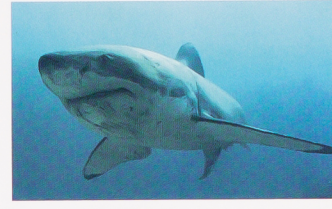
■グレイ・リーフシャーク

Gray Reef Shark
ネズミザメ目、メジロザメ科。世界の熱帯域に分布。メジロザメの近縁種。サンゴ礁の沖合にすむ。他のサメ類同様、嗅覚に優れ、血の匂いに敏感である。鼻面にあるロレンチニ氏器官で生物の出す弱い電流も感知する。フカヒレ、カマボコ材料。



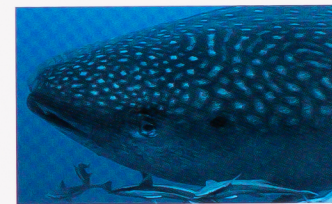
■ホホジロザメ

White Shark
ネズミザメ目、ネズミザメ科。世界の温、熱帯域に広く分布。全長6m、1200kg。英名はホワイトシャークあるいはグレートホワイトなので誤ってシロザメと訳されることがある。ちなみにタイガーシャークは日本名イタチザメ。キヤットシャークは日本名トラザメ。ブルヘッドシャークは日本名ネコザメ。尾鰭は半月形で強い遊泳力のあらわれ。二等辺三角形のかみそりのように鋭い歯をもつ。化石の歯から推測すると過去には、20mの類縁種が存在した。日本近海にも出没するが多くはない。オーストラリア、南アフリカ、カリフォルニア沿岸に特に多いのは餌となるアシカ、アザラシ、ペンギンなどが多いためであろう。サメの中では最も危険な種。映画「ジョーズ」の主役は本種。フカヒレ材料。近年乱獲により減少しており保護の必要性が言われている。



■ジンベイザメ

Whale Shark
ネズミザメ目、ジンベイザメ科。世界の温帯、熱帯域に分布。体長20m。魚類のなかでは最も大きくなる。プランクトン食で小甲殻類や小魚を食べる。性質はおとなしく、カツオ等の群がつかため、漁師は「サメつき」と言って、カツオ漁の目安にする。



■カスリハタ

Poteto Cod
スズキ目、ハタ科。沖縄付近から南シナ海、グレートバリアリーフに分布。体長1.5m、グレートバリアリーフに多い。



■スダレチョウチョウウオ

Butterfly fish
スズキ目、ハタ科。沖縄付近から南シナ海、グレートバリアリーフに分布。体長1.5m、グレートバリアリーフに多い。



ベッソンのひとりごと

高橋直樹

“映画では夢が叶えられるということがとても重要なんだ”——92年の5月にパリで会ったベッソンは、ピュアな眼差しでこう語った。「グラン・ブルー〜グレート・ブルー完全版」の日本公開を前に、この作品について大いに語ってもらおうという我々に対して、ベッソンが熱く語るのは「アトランティス」の話に終始した。

この作品にはひとかたならぬ情熱——想いが詰まっているからこそ、ベッソンは饒舌だった。“僕にとって自然は最も強いものだ。だから人間は自然に対して戦おうとするのではなく、自然の中に包み込まれようとする知性と控え目さか絶対に必要だ”と警鐘を鳴らすかと思えば、マナティとの海中デートで死にそうになったと笑う。また自ら潜った海の姿——絶望的なまでに汚れてしまった生命生誕の源に対する想いを語る。

完成から1年以上を経た「アトランティス」に対するベッソンのこだわり、それはあらゆる映画的な規制、制約を離れ、自由奔放に海とそこに生息する生物たちの姿を綴ったという「特別な作品」であるからこそこのこだわりだ。

プロモーションで来日した彼は、この作品が——風変わっていること、単純なようにいて様々なテーマを含んでいるのだということを真摯に語ってくれた。冒頭のナレーション、IIの詩的なパート・タイトルのみが我々に提示される言葉のすべてである。歓喜、哀愁、崇高、至福、戯れ、愛……。映画は直接的な言葉ではなく、海洋生物たちの姿を通して語りかけてくる。それはベッソンの饒舌。泉のように溢れ湧くイマジネーション、詩、エモーション。“冒頭のナレーションで言ってるように、観客が自分の殻を脱ぎ捨てて映画の世界に入っていくようにしてくれれば、凄く楽しんでもらえると思うよ。誰にも解き放たれた感覚で映画を観てもらえるはずだ”。

ベッソンの想いが詰まった「特別な作品」——“余計なものをいっさい排除して、生命生誕の源である海を舞台に海洋生物の姿を通して人間を描くという冒険心に満ちた映画”「アトランティス」は、構想10年、撮影38ヶ月、サウンドトラックにも1年以上の歳月を費やして完成したエリック・セラとのコラボレーションの至高の到達点だ。あくなき冒険の果てに完成した結晶、豊かな詩情を湛え、愛に満ち溢れた贈り物。

東京でのインタビューで再会した時のベッソンの眼差しは、ずっと遠くを見つめているように思えた。それは「アトランティス」で体感できる美しい世界と、実際にベッソンが潜り、目にした海の姿とのギャップのように思えて仕方がなかった。“詩的な美しさの内側に隠されていること、僕が書いたシナリオの奥にある重要な側面を忘れてほしくないんだ”。ボツリとこぼしたひとりごとのような言葉と苦笑を演じたような微笑み。そこには海を愛するリュック・ベッソンというひとりの男の本音が垣間見えたように思えた。

製作	【スタッフ】 ゴーモン/ゴーモン・プロダクション
監督	ジェッキ・ゴーリ・グループ・タイガー
音楽	リュック・ベッソン
製作総指揮	エリック・セラ
撮影	クロード・ベッソン
撮影助手	クリスチャン・ペトロン
潜水監督	フランソワ・ジョンティ
潜水管理	ジャン=マルク・プール
映像	マルク・ビエレ
技術指導	リュック・ベッソン/クリスチャン・ペトロン
専門家	ビエール・ラポート
	マンディ・ロドリゲス/デヴィッド・ベイン
	イブ・ルフェーブル/ロドニー・フォックス
	フィリップ・カガン
北極における潜水指導	アンドレ・ラ・ビエレ
オーケストラ	ロンドン・ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団
指揮	ジョン・アルトマン
歌	マリア・カラス「夢遊病の女」 ヴァネッサ・パラディ

アトランティス

Side 1 Chapter

- 1 Opening
- 2 first day~light
- 3 mind
- 4 rhythm
- 5 beat
- 6 soul

Side 2 Chapter

- 7 dark
- 8 spirit
- 9 tenderness
- 10 love
- 11 hate
- 12 last day~birth
- 13 Ending